Meisei University

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

3

ウィーンのマーラー
音楽院時代
師と仲間
(1874-1876)(承前)

当時の巨大なオーストリー＝ハンガリー帝国の首都であり、またいわば中央ヨーロッパの首都でもあったこの輝くばかりの都市に放り出された15歳の田舎の少年が感じたウィーンに対する印象について資料はなにもない。この先五年以上もの間マーラーは休暇期間をのぞいてほとんどウィーンを離れることはなかったが、大都会の喜び、首都が用意してくれる数しれない楽しみにふけるといったことは彼にはまったくとは言わないまでもほとんどなかった、それほど彼は音楽や一般の学習に専念していた。閉じこもって生活してはいたが絶えず住所を変えている。騒音のためであるとか金欠が原因で彼は引越さなければならなかった。彼の日常生活は彼同様あまり財に恵まれなかった多くの学生と同じものである。よく彼は音楽院の友人たちと共同生活をしたものだが、その中に彼の従兄で絵を勉強しているグスタフ・フランクがいた。このフランクがレデッチュにいる彼の叔父の一人に宛てた手紙にマーラーがつけ加えた追伸があり[33]、この頃の彼の主な関心事が明かされている。彼は当然のごとく「自分の翼で飛び立ち、今月は例外だが、家族は一銭たりとも仕送りする必要などなくなろう」と高言している。

事実ウィーンに来てからすぐにマーラーはエプシュタインの斡旋してくれたピアノの家庭教師をしている。このような家庭教師からの収入で彼は父親からの雀の涙ほどの仕送りと併せてどうにかこうにか食いつないでゆくことができた。1876年10月の手紙[34]では音楽院の事務局に登録料の割引を申請している、とはいってもこの割引は翌年には打ち切られている。「父は私の生活費を援助することができませんし、学費を払うことは更にできないことです。私自身で支払うこともできません、ピアノの家庭教師がなくなってしまったのでウィーンの生活費がとても不安定になってしまったからです。エプシュタイン先生がいくつか家庭教師を斡旋してくれると約束してくださいました。」この手紙の下欄にエプシュタインの書き込みがある、「失礼とは思いますが私はこの請願書を支持します、そして学費の半額に相当する補償金を援助いたします。」この最後の文は誤解を招いた。エプシュタイン自身がマーラ

* 一般教育　助教授　フランス語

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ーの学費の半分を支払うことを申し出たように思われてきたが、今回は委員会がグスタフに減額請求を認めることになり学院内で最も有能な生徒に対して送られる奨学金を彼に利用させたというのが可能性としては高いだろう。

音楽院の二年目におそらくマーラーは二ヶ月間ヴォルフとクルツィツァノフスキーの三人で共同生活をしている[35]。三人は当時とても仲が良く互いに自分たちの作品を演奏しあっている。ヴォルフは当時彼の歌曲をこの二人の友人のものよりも劣っていると考えていたようだ[36]。一夜漬けでマーラーが音楽院のコンクールのために四重奏曲の一楽章をピアノで作曲するものだから他の二人はリング通りのベンチに寝に行くはめになったものだ[37]。

この三人の仲間は、なかでもヴォルフは生徒をあまり集められなかったが、月末になるといつも完全な貧窮状態に陥った。そうすると一人がぐるになって彼の生徒の一人に彼が急に旅立ってしまったと言ってそれまでの月謝を払ってもらったものだ。こうすると三人は何回分かの食事代にありつけたが、生徒を一人失うことは逆に高いものについた。後にマーラーはルードヴィッヒ・カールパートにウィーンの乳製品加工工場を示して、素寒貧になるとここでフーゴー・ヴォルフと一緒にくずのチーズを買ったものだ、と述懐する。さて貧乏物語の最後はベルンハルト・マーラーが息子のためにクリスマスプレゼントとして送った緑色のオーヴァーコートの話である。「長く着られるように」選んだのでサイズが大きかった。マーラーは裾で彼の後ろを掃いているのに気づかず何日間も意気揚々と着て歩いた。そのうちに、彼が通るとくすくす笑いが起こるので気がついた。そこで彼はルドルフ・クルツィツァノフスキーにあげてしまおうと決心した、彼よりも背が高かったからだ。

マーラーが絶えず夢想がちに現実から超然としていたことは人も知るとおりだが、ナタリー・バウアー＝レヒナーはこの時代でもマーラーが放心してしまう例を一つあげている。ある日彼は自分の『ピアノとヴァイオリンのためのソナタ』を音楽院で練習していた。作品や自分の演奏に満足できず彼は真冬であるのも忘れてマントもステッキも帽子も置いたまま走って通りに出ていってしまった。リング通りに着いたときには楽譜の半分をなくしていたがそれにも気づかなかった。幸いなことに仲間の二人が彼の上着をもって彼の後を走って追いかけ、四散したソナタの楽譜を拾い集めたのも彼らだった[38]。

音楽院の書類には学期間中に定期的に行われる生徒のコンクール試験でマーラーの作品が公開演奏された記録は一つもない。とは言っても彼の作品の演奏は1876年もしくは1877年に計画されていたことは、マーラーが従兄弟のフランクと一緒にレデッチュにいる彼らの叔父に宛てた手紙に書かれている[39]。手紙には「私の作品の一つが音楽院の演奏会で演奏されることになるのはかなり可能性が高いです」とある。確かに1875年12月末クルツィツァノフスキーの『五重奏曲ハ短調』は演奏されているが、在校生によって演奏されたマーラーの最初の作品は、おそらく『ピアノ五重奏のスケルツォ』になろう、これは1876年6月に作曲の最優秀一等賞を取っている[40]。音楽院時代のマーラーは勉強漬けの毎日だったが、それでも絶えず作曲はしていた、それは音楽院の勉強のためであるばかりか自分自身のためでもあった。この時代に書かれたものでは短い断片くらいしか残されていない、『ピアノ五重奏曲』の一楽章、同じ編成のスケルツォの冒頭部分、リーダーが二曲[41]位なものである。その他のものはすべてマーラー自身の手によっておそらく消去された。

これら消失した作品の目録を作成するのは、情報が曖昧だったり、矛盾していたりするの

NII-Electronic Library Service

Meisei University

で簡単なことではない[42]。この点に関して、ナタリー・バウアー＝レヒナーが重要な証言を残している、難問の大部分が彼女の証言だけで解決するほどである。実際マーラーが彼女に、音楽院では一曲たりとも完成したことはなかった、いつも一楽章か二楽章で、時にはとても稀なことだが三楽章まで行ってやめてしまったものだ、と語ることになるからだ[43]。「それは新しい曲を書き始めたくてうずうずしたからではない、むしろ作品を書き上げる前すでに、その作品が私には不十分なものとなってしまうからだ。書き上げる前に私は作品を乗り越えてしまったのである。当時私に創作能力がなくて根気に欠けていることなど問題にならないと察することができた人がいただろうか。」しかも時にマーラーは「わざわざ自分の作品をノートすることもなく、頭の中に置いておいた。」それでクルツィツァノフスキーや音楽院の他の仲間たちは、彼は一つだって作品を完成させることはないだろうと予言していたもので、そこでマーラーはまさに進歩し続ける若者をどこまで評価すべきか難しいものだと言って結論づけた[44]。このようにマーラーの伝記作家たちが語っている多くの弦楽四重奏曲やピアノ五重奏曲は決して完成されることはなかったのだろう。これもナタリーとの談話によるが[45]、マーラーはさらに当時の彼の楽想が「全く独創性に欠け」、そういった楽想は彼には常に「自分以外のところから来た」ものだったと嘆くことになる。残存するいくつかの断片作品は彼の判断が間違っていないことを示し彼の自己判断の正しさを示すことが彼にはできたことを証している。

音楽院時代に書かれた交響曲の存在はナタリー・バウアー＝レヒナーによって証明される、彼女はこの時代すでにマーラーと出会っているのだ。作品を発表するべきコンクールの始まる前に、この交響曲のパート譜を自分で写すために日夜働きづめだった、勿論写譜屋に払う金がなかったからである。疲れも手伝ってミスはかなりの数にのぼった。コンクールの前日初見審査の段階で「才能はあっても金のない連中の敵である」[46]審査員のヘルメスベルガーは憎々しげに怒り、「あなたのパート譜はミスだらけだ。こんなものを私に指揮しろと言うのか」と大声で怒鳴りパート譜を床に投げつけた。マーラーはすぐに訂正の必要な箇所を直し始めた、少なくとも初見演奏してもらいたかったからだが、ヘルメスベルガーは取り付く島もなく、土壇場になってマーラーにピアノ組曲を作曲するよう言いつけるばかりだった。作曲者の意見によればこの組曲は急ぎの仕事で表面的なものだった、ところが他の曲よりも劣るのに賞を得た[47]。

音楽院の書類にはこのコンクールについていかなる記録もなくいささかこの件にかんする詳細は疑ってかかる方がよいだろう。とは言ってもナタリー・レヒナーは当時姉のエレンとともに音楽院管弦楽団に所属していたのだから彼女の証言には反論の余地はないだろう。また同じ話が違った形で伝えられてもいる[48]。

この紛失した交響曲、そして『五重奏曲』やいくつかの『ピアノ四重奏曲』[49]に加えてマーラーの初期の作品からいくつかあげておこう。『ヴァイオリンとピアノのためのソナタ』[50]、『チェロのための夜想曲』[51]、もう一つの交響曲[52]、ピアノの小品[53]（これはシュワルツやエプシュタインの前で演奏された）、歌劇『エルンスト・フォン・シュヴァーベン』[54]の断片、数曲のリーダー[55]（いくつか断片が残っている）、『ピアノ組曲』[56]『弦楽四重奏曲』[57]。二十五年後マーラーが打ち明けた話として、とは言っても詳細ではおおむね信頼の置けそうにない記憶に頼ってではあるが、上述の最後の二曲に言及している。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

音楽院初年度はマーラーにとって素晴らしい成績で終了した。1876年6月23日のピアノのコンクールで彼はシューベルトのイ短調ソナタ[58]の第一楽章を演奏して五つある最優秀一等賞の一つを審査員の満場一致で獲得している。この選曲にはエプシュタインの影響がみられる、エプシュタインはまだシューベルトのピアノ・ソナタがこの天才の下書きにすぎないと見なされていた時代に、これらの大作を広めようと努力していた。マーラーはすでにこの教師を高く評価している、もちろん彼は後にナタリーを相手に、彼の最大の欲望、熱烈な願望はシューベルトの作品を演奏することによって「彼の魂を満たすもの、揺り動かすものすべてを、これほどに強い感性と完成された形式で、表現すること[59]」が自分自身でできることだったと回想することになる。

ピアノ・コンクールの一週間後7月1日にマーラーは今度もまた満場一致で別の最優秀一等賞を得ている。これは作曲賞で《ピアノ五重奏曲[60]の冒頭楽章》に対して与えられたものだ。このような学業成績を携えて彼はイーグラウへ夏休みの帰省をする。7月31日こうしてすぐに彼は州立歌劇場の演奏会に参加の要請をうける。この演奏会で彼はシューベルト『さすらい人幻想曲』と自作のピアノとヴァイオリンのためのソナタを演奏する。ヴァイオリンはイーグラウの若いヴァイオリニストで、最近ウィーン音楽院を卒業したリヒャルト・シュラームルだった。

翌年の夏マーラーはイーグラウの自宅とモラワン地方で過ごすことになるが、これはヨーゼフ・シュタイナーともども再びグスタフ・シュワルツに招待されたからだ。この二人の友人は一緒に『エルンスト・フォン・シュヴァーベン』の台本と楽譜の断片に再会することを喜んだ。もちろんこれは前年、屋根裏部屋のボール箱に入れておいたもので、また共同作業するつもりでいた。彼らは邸宅に着くとすぐに残しておいたところに行って楽譜の断片諸々を探してみたが見つからなかった。シュワルツ夫人がある日屋根裏部屋を「整頓」しようと思って手当たり次第「古ぼけた書類」やら原稿の束を燃やしてしまったという話を聞いた彼らの落胆はいかばかりだったろう[61]。

1879年にマーラーはヨーゼフ・シュタイナーに長い手紙を書くが、グスタフ・シュワルツ邸に滞在した思春期のマーラーを思わせるのはたったの一節にすぎない。「この灰色の海から浮かび上がってくるのはあの親しげな名前、モラワン[62]とロノウ。そして僕には見えてくる、あの庭園が、あの優しい人々が、一本の木が、そこには一つの名前が刻まれている。パウリーネ。すると一人の青い目の少女が僕の方に身をかがめ葡萄の一房を手渡してくれる、—この思い出に僕は再び顔が赤らむ思いだ、あの青い目はある日僕を盗人にした、その目を僕は再び見る—そしてすべてが新たに消え去る。」どのような盗みによってこの若き盗人は罪を犯したのか。この挿話から三年たったこの手紙はそのことを教えてはくれないが、牧歌的色調の一幅の絵を想像させてくれる。この話は言う価値がある、というのはその話がおもしろそうだからというのではなく、ここまで知られているマーラーの生涯で初めて出てきた何か感情的な性質のエピソードだからだ。

この夏の終わり、マーラーは自宅にルドルフ・クルツィツァノフスキーを招いた。ルドルフの他に二人の音楽院の学友、オイゲン・グリュンベルクとアウグスト・ジーベルト[63]とともに彼は、1876年9月12日イーグラウのホテル・チャップで開かれた慈善演奏会に参加することになる。その収益金は後に高校の書籍や必需品の購買に供される。そのプログラムは

NII-Electronic Library Service

Meisei University

その二日前に地方新聞に告知されたが、以下の通りである。

1⁰）クルツィツァノフスキー『ピアノ、二つのヴァイオリン、ヴィオラのための四重奏曲（ママ）』

2⁰）ヴィュータン『ヴァイオリン協奏曲ニ短調』第一楽章（ソリスト、ジーベルト）

3⁰）シューベルト『さすらい人幻想曲』ハ長調（マーラー）

4⁰）マーラー『ヴァイオリンとピアノのためのソナタ』

5⁰）マーラー『ピアノ、二つのヴァイオリン、ヴィオラのための四重奏曲（ママ）』

6⁰）ショパン『バラード』（マーラー）

7⁰）アラール『二つのヴァイオリンとピアノのための協奏曲』

このプログラムはマーラー青年時代の作品表をわかりやすいものにしてくれるどころか、その不正確さがより紛糾させているようだ。幸いなのは一週間後に同じメーリッシャー・グレンツボーテ紙が情報に耐える記事を掲載する。上記のプログラムはまったく通常の楽器編成ではない（ピアノ、二つのヴァイオリン、ヴィオラ）二つの《四重奏曲》が含まれているが、17日の記事ではそれとは違って、クルツィツァノフスキーの《五重奏曲》と「音楽院で首席の作曲賞を得た」マーラーの五重奏曲と書かれている。つまりこの演奏会で演奏されたこの二つの作品は五重奏曲であって四重奏曲ではない[64]。マーラーが1876年7月1日に首席の作曲賞を得たのはピアノ五重奏曲であって、もちろんその第一楽章が残存しているというので1876年に作曲された『四重奏曲イ短調』と考えたくなるのも無理からぬことだ。

無署名批評は作曲家としてのマーラーを激賞している。「この二作品（ソナタ、五重奏曲）のいずれがより高い水準にあるのか決定するのは難しいことだろう。どちらも、堂々とした創意工夫の豊かさ、作品化する巧みさを備えている。どちらも天才的作曲家をあかしている（ママ）。ヴァイオリンの畏怖すべきパートはジーベルト氏によって、テクニックにおいても演奏解釈においても、称賛に値する表現を得た。」ピアニスト・マーラーについても同様に賞賛を惜しまない。「シューベルトの『幻想曲』で彼のまぎれもなく独創的な演奏そして考え方は見事なものだった」し、もう一つのショパンの『バラード』でも同様に、「この疲れを知らぬ独奏者の秀逸な演奏はまことにエプシュタインの弟子であることを立証している。」

この演奏会で譜めくりをしていたのは音楽院の学友カール・シュニュールマンで彼の証言によると、マーラーは「シューベルトのこの大幻想曲を間違って適当な調で始めてしまった」、さらに中断するどころか曲全体を移調して演奏した[65]。これは実際に間違えてはじめたのか、それとも当時は頻繁に行われていた巨匠的な芸当だったのか。その真偽は確認することはできないが、どれだけ粗雑な仮説を立ててみたところで、またマーラーは常々大作曲家の考えに対して細かいところまで忠実であろうとしていた演奏態度から考えてみても、このエピソードは本当らしさの最後に位置する。9月12日の演奏会は聴衆の熱烈な喝采を浴びたが、週刊誌の批評ではもっと多くの聴衆に聞かれるべきだったとある。

その年音楽院は9月20日に新学期が始まり、マーラーはエプシュタインのピアノと、フランツ・クレンの作曲法の授業を再受講した。和声法は捨て、同じクレンの（初年度の）対位法のクラスに登録する。この点に関して様々な異論が持ち上がっているのではっきりさせなければならない、というのもマーラーの作品では対位法のしめる役割は大きいのだから。初期のマーラー伝記作家たちはヘルメスベルガーが《免除》したので和声法と対位法は《飛

NII-Electronic Library Service

Meisei University

び級》したと言ってきた[66]。音楽院の資料ではこの主張を全面的に肯定するものはない。ローベルト・ヒルシュフェルトも1912年3月15日にカールパートに宛てた手紙[67]で主張するように、実際マーラーは音楽院二年次初め、クレンの対位法クラスに登録した。以下の文はその手紙の主要部分である。「マーラーの礼賛者は常々対位法を飛び級して即座に作曲法のクラスに入ったと主張してきた。しかし私には当時の資料からの証拠があるが、実際は三等賞を取ったにすぎない、つまり、彼は可をとっただけで、音楽院の最終報告書では、内緒で見せてもらったが、そのような事実を記載していない［…］。この時代、ブルックナーが対位法を教えていた［…］、しかし、対位法にしろ作曲法にしろクレンの授業を受けている方が賞をとりやすかった。」

ヒルシュフェルトはマーラー生前中ウィーン批評界におけるマーラー最悪の敵だった。マーラーの死後すぐに初期伝記作家たちの主張を否定するために音楽院に調査するなどは、もうすでにあやしさがただよう。ところで彼が手にした書類というのはまだ存在していて、それによってわかることは以下の通りだ。クレンの生徒の中にマーラーという名前は1877年末の登録簿にはない。ところがそうはいっても、1876年9月にこのクラスにマーラーは登録されている。だからマーラーが《三等賞》をとったというヒルシュフェルトの主張は全く無に帰してしまう。音楽院に「内緒」で見せてもらったことについてはこれ以上ばかばかしい説明は考えにくいだろう。かつてどこに「守秘義務」によって自分の学生の成績が見られない学校組織があっただろうか。

とはいえ学年末に平均以下の成績を取った学生は登録簿にその名が載らないことは事実だ。マーラーは彼の作曲で二度にわたって輝かしい賞を得ているのに和声法や対位法で賞を取れなかったとすると、それはこの二教科で彼の努力が足らなかったことを意味しているのではなく、彼の落ち着きのない精神が、教師連の彼に強いる書法の規律にうまく折り合わなかったという方が可能性が高い。そしてまた、ほかの天才たち同様、とりわけワーグナーもそうだったが、自分の作品に必要な知識、テクニックは自分自身で獲得しなければならなかったということでもある[68]。というのは個人的に工夫し直すことをしなければ真の創造はない。対位法のエキスパートは山ほどいるが、わけの解らないものを書くし、「主題を得意とする」人もたくさんいるが想像力を欠いている、だからそれほど才能のない生徒と同じように教科書的な規則に束縛を受けることを有能な音楽家が拒絶するのを見て誰も驚きはしない。後にマーラーはそれでもなお、音楽語法のクラスをもっと熱心に受けておかなかったことを後悔しよう。サボったことで「かなりの損害を被った」とすら考えていたようだ。『交響曲第八番』の第一楽章を作曲した人に対して対位法の技量に欠けると非難すること以上に無分別なことは何も想像することはできない。

33) 1876年あるいは1877年のこの手紙はロゼー・コレクションにある。Gustav FRANKは1859年9月14日ウラシム（ボヘミア）に生まれ、絵の勉強のためウィーン王立アカデミーにまもなく入学する。後に彼は名声を得るがそれは版画家としてである。政府刊行物（*Oesterreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild*）のイラストのいくつかが彼に任されている（Cf. L. EISENBERG, R. GRONER : *Das geistige Wien. Künstler-und-Schriftsteller-Lexikon*, 1890, p. 67）。

34) 1876年の楽友協会の記録ではこの資料は518の番号がついている。10月10日に収受したと記されている。失われてしまったが他に二通、同じ目的のマーラーの手になる1876年9月5日と1877年9月10日付けの手

NII-Electronic Library Service

Meisei University

紙があった。

35) ヴォルフの手紙によるとオペルンリング23番地であろう。テオドール・フィッシャーによるとその後マーラーはウィーンの同じ区のマルガレーテンシュトラッセ7番地（四階、40号）に住む。

36) クルツィツァノフスキーの義妹のローレンツ夫人による。*GAB*（GÖLLEICH, August : *Anton Bruckner, ein Lebens und Schaffensbild*, Bosse, Regensburg, 1936）の引用。

37) *AMM*（MAHLER, Alma : Gustav Mahler, *Erinnerungen und Briefe*), *p. 82.* この挿話で当時マーラーがピアノで作曲したことがわかる、後にマーラーがナタリー・バウアー＝レヒナーに語ったとおりである。ところでこれは弦楽四重奏曲かピアノ四重奏曲か。

38) *NBL*, p. 65.

39) ロゼー・コレクション（上記参照）。この手紙は9月17日付けとなっておりおそらく1876年もしくは1877年になって書かれたものであろう。ヘルメスベルガーが練習した『交響曲』に違いない、これにはよく知られたエピソードがある（下記参照）。問題の叔母はStranskyやFreischberger夫人が言及した人である（下記参照）。

40) 1876年では最優秀賞は審査員の満場一致で授与されたものであり、通常の一等賞は授与されなく、二等賞が同位で二人。

41) アルマ・マーラー・コレクション。

42) 下記未完・破棄・消失・断片作品表参照。

43) 強調筆者。

44) *NBLS*（BAUER-LECHNER, Natalie : *Mahleriana*（未発表の残存する原稿コピー、一部だけ1923年にTalによって出版される）アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ・コレクション。）

45) 同書、1901年8月4日。

46) 同上。

47) 1900年にまたマーラーはナタリーに音楽院のコンクールのために一晩でスケルツォを作曲しなければならなかったと語るが、それはおそらく1878年に賞を得たものであろう。

48) Richard Spechtによると（*Die Musik*, VII、1908年5月15日）パート譜の誤りはマーラーの仲間が彼を陥れようとして故意にしたものだそうだ、そして問題の作品は音楽院で演奏された『五重奏曲』であり、この作品は1876年にイーグラウでも演奏された。ブルックナーはこの話を時々していたが、それは『五重奏曲』ではなく『ソナタのアンダンテ』だった（ブルックナー『書簡集IV』Max Auer編）。

49) 上述および巻末参照。1876年7月音楽院で一等賞を得、その年の9月にイーグラウで演奏されたこの『五重奏曲』は、ドナルド・ミッチェルの推論とは違って『ピアノ四重奏曲』ではない、この曲は『五重奏曲』よりも後のものであり、マーラー自身の証言によればモスクワでのとあるコンクールに楽譜を郵送した際紛失してしまった。1878年に作曲賞を得た『スケルツォ』は二つ目の五重奏曲の楽章であったかも知れないが、おそらくは何か別の独立した楽章だろう。

50) 1876年イーグラウで演奏された。上述の話は音楽院でこの曲が練習されたときのことだ（*NBL*, p. 65）。

51) *NBLS*

52) 下記未完・破棄・消失・断片作品表参照。この作品は完全な形で記譜されはしなかった。

53) 下記未完・破棄・消失・断片作品表参照。

54) 1875年にマーラーがシュワルツの前で演奏した。前記参照。

55) 下記未完・破棄・消失・断片作品表参照。二曲の断片がアルマ・マーラー所蔵。

56) 前記参照。

57) AMM, p. 82.

58) Max Steinitzerはリープニッツでのマーラーに関する思い出を書いているが（BSP, p. 13）、マーラーはシューベルトのニ長調ソナタを演奏して音楽院の審査員にいたく感銘を与えたと証言しているが、公的な資料ではイ短調ソナタとなっている。

59) NBLS, 1901年8月4日

60) 下記未完・破棄・消失・断片作品表参照。

61) この挿話はフェリックス・シュタイナー博士から聞いた。それによると彼の父は最晩年にいたるまで『エルンスト・フォン・シュヴァーベン』のいくつかの断片を思い出しながら演奏することができたと言うことだ。

62) 他方このエピソードはマーラーが初めてシュワルツ邸を訪れたときに起こったとも考えられる。

63) August SIEBERTは音楽院長老ヨーゼフ・ヘルメスベルガーの生徒。後に二年間ロゼー四重奏団に加わる。この演奏会のポスターは*BDB*（Kurt BLAUKOPF : *Mahler : sein Leben, sein Werk und seine Welt in Zeitgenösischen Bildern und Texten*, Universal Edition, Vienne, 1976）の（資料30）で復元されている。

64) クルツィツァノフスキーの『五重奏曲』は前年の12月22日に音楽院で演奏されたハ短調のそれである可能

NII-Electronic Library Service

Meisei University

性が高い。*DMM*1（Donald MITCHELL : *Gustv Mahler. The Early Years.* 邦訳ドナルド・ミッチェル、喜多尾道冬訳『マーラー、さすらう若者の時代』音楽之友社）はイーグラウで演奏されたマーラーの作品は、前年の夏に音楽院賞を得た作品とみなして私たちのよく知っている1876年の『四重奏曲』と考えている。

65） マーラー自身もこのことを言っている（*NBLS*）。アルフレッド・コルトーにこの原稿のゲラ刷りを読んでいただき貴重な助言を拝領したが、彼はこの武勇伝がまったく非現実的で、創作だろうとみなした。

66） Hans HOLLANDER の記事参照。Die Muziek 1928/1929, p. 215.

67） BMG（Ludwig KARPATH : *Begegnung mit dem Genius*), p. 99

68） 注記しておく必要がある、ブラームスが1879年4月29日にエリーザベート・フォン・ヘルツォーゲンベルクに宛てた手紙で当時の音楽院の教育に関して非常に不満があるという意見を述べている。

マーラー未完・破棄・消失・断片作品表

未完・破棄・消失作品

1. 劇作品―オペラ

HERZOK ERNST VON SCHWABEN（エルンスト・フォン・シュヴァーベン公）
（1875年以前）
未完
台本、ヨーゼフ・シュタイナ
原作、ルートヴィッヒ・ウーラント？

DIE ARGONAUTEN（アルゴ船の船員たち）（1880-90）
未完
台本、マーラー、またはヨーゼフ・シュタイナー
原作、グリルパルツァー？
頭韻

RUBEZAHL（リューベザール）
五幕の妖精歌劇
未完
台本、マーラー（アルマ・マーラーがその見本刷りを所持、第三幕と第五幕の一断片のみが欠けている。現在 Julia Morrison のコレクション）
1882年改訂版の台本は残っていない。

無題のオペラ計画（1887-88）
台本、カール・フォン・ウェーバー、マーラーのアイデアに基づく。

2. 機会作品

VORSPIEL MIT CHOR（合唱付き前奏曲）
カッセルにおける Karl Häser 俳優活動五十周年記念
初演、1883年11月2日カッセル劇場

NII-Electronic Library Service

Meisei University

DER TROMPETER VON SAKKINGEN（ザッキンゲンの喇叭吹き）
Joseph Viktor von Scheffel の詩を描く《活人画》のための伴奏音楽
初演、1884 年 6 月 23 日カッセル劇場

DAS VOLKSLIED（民謡）
Salomon Hermann Mosenthal の《リート、合唱、活人画つきの詩》
初演、1885 年 4 月 20 日カッセル劇場
（古い民謡をもとにマーラーがモーゼンタールの詩に管弦楽をつけた「舞台用嬉遊曲」）

3. 管弦楽作品

交響曲（第一番）（1876-78）
音楽院のコンクールに提出された
消失または破棄

交響曲（第二番）イ短調（1876-78）
三楽章、手稿
消失または破棄

北欧交響曲（または組曲）（1878-82）
1879 年 12 月 14 日の Krisper 宛書簡で言及される。
消失または破棄

4. 室内楽作品

POLKA MIT EINEM TRAUERMARSCH ALS EINLEITUNG（葬送行進曲の序奏をもつポルカ）（1867 年頃）
ピアノ作品？

ピアノ小品（1875 年以前）
バーデンでマーラーがエプシュタインの前で演奏した「ワーグナー」風スタイルの作品
記譜されなかったと思われる。

ピアノ組曲（1875-78？）
音楽院で賞をえた。

チェロ（とピアノ？）のための夜想曲（1876-78）

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ（1876）
初演、1876 年 7 月 31 日イーグラウ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

リート（「トルコ人には美しい娘が居る」）（1867年頃）
Gotthold Ephrain Lessingの詩

リート
音楽院のコンクールのために作曲されたもの

リート集（1875-80）
うち二つの断片が残る（下記断片作品参照）

弦楽四重奏曲（？）（1880頃）
一晩で作曲された。

ピアノ四重奏曲（第二番？）（1878）
初演はウィーン、Theodor Billroth邸。
手稿は作曲コンクールのためロシアに送られ、消失。
この作品は第一楽章が残存するイ短調のピアノ四重奏曲（下記断片作品参照）か、1878年の五重奏曲と思われる。

ピアノ五重奏曲（1876）
この第一楽章が1876年7月ウィーン音楽院の賞を受ける。
公開初演は1876年11月12日イーグラウ

ピアノ五重奏曲（1878）
未完
スケルツォ楽章は賞を受け1878年7月11日にウィーン音楽院で演奏される。
これはナタリー・バウアー＝レヒナーの『グスタフ・マーラーの思い出』（邦訳、高野茂訳、音楽之友社、1988、110-111頁）で言及されている五重奏曲か、上記のピアノ四重奏曲と同じもの。

断片作品

1）ピアノ四重奏曲（1876）
第一楽章イ短調（*Nicht zu schnell ; Entschlossen*）
公開（？）初演、1964年11月12日ニューヨーク。ピアノ・ピーター・ゼルキン、ガリミア四重奏団のメンバー。

2）ピアノ四重奏曲（1876）
スケルツォト短調
（30小節程）

NII-Electronic Library Service

Meisei University

3）リート（日付なし）
ニ短調
詩、ハイネ（*Es fiel ein Reif in der Frühlingsnacht.* 春の宵に霜が降りた）
（22 小節程）

4）リート（日付なし）
ハ長調、転調が多い。
詩、ハイネ（*Im wunderschönen Monat Mai.* 美しき五月に）
（18 小節程）

5）（前記の断片作品とほぼ同時代）第一交響曲のスケルツォ楽章、ピアノ四手用編曲（または原曲）の断片。
イ長調
（第一部 22 小節、第二部 30 小節）

NII-Electronic Library Service